

I. 鳴門海峡の渦潮世界遺産学術調査検討委員会

1. はじめに

鳴門海峡の渦潮は、地球と月と太陽の引力に起因する起潮力が生み出す潮汐による潮流が、海峡を流れる際に、海峡中央部の速い本流と、その両側の緩やかな流れの水域との境界付近の流速の違いにより生じる自然現象である。

特に、鳴門海峡の場合、満潮の潮流は、紀伊水道より鳴門海峡の南側へ直接到達する一方、大阪湾の紀淡海峡から大阪湾、明石海峡を通過し、播磨灘を経由した潮流（淡路島を南から反時計まわりに1周した潮流）が、6時間後に鳴門海峡の北側へ到達する。しかし、その頃には海峡の南側は干潮を迎えているため、海峡を挟んで南北に大きな水位差が発生する。このように、鳴門海峡が持つ様々な要因によって、非常に大きな渦潮が発生するという特徴を有している。



写真-1 大鳴門橋と渦潮



写真-2 鳴門海峡に発生する連続する渦

鳴門海峡は、その特異な渦潮や海峡特有の地形が生み出す自然景観により古くから景勝地として人々に親しまれ、江戸時代の淡路国名所図会（図-1）をはじめとした地誌や芸術文化に大きな影響を与えているとともに、海峡の自然景観は国の名勝にも指定（文化庁、1931）されている。

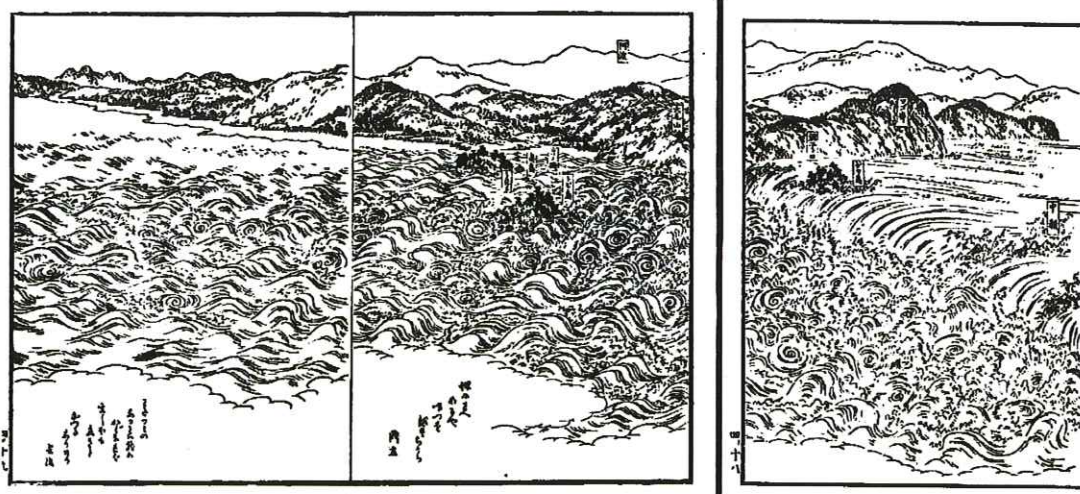


図-1 淡路国名所図会（人と自然の博物館所蔵）

このように、鳴門海峡の渦潮は、その景観の雄大さとともに自然が生み出す不思議な現象として、古くから畏怖の念とともに人々に親しまれてきたが、世界自然遺産登録に向けては学術的な調査と解析が必要である。

2. 委員会設置目的

本委員会は、鳴門海峡の渦潮の世界遺産への登録を目指し、世界的な普遍的価値、世界的唯一性を立証するための学術的価値を検討し、今後の学術調査の方向性を見出すことを目的として設置され、平成 26 年度から 28 年度にかけて次の具体的な検討作業を進めてきた。

- ①世界的な普遍的価値、世界的唯一性を立証するための学術的価値の検討
 - ・学術的調査検討に向けたアプローチ
- ②今後の学術調査の方向性の検討
 - ・ロードマップの整理

3. 委員会委員等

1) 委員会

鳴門海峡の渦潮世界遺産学術調査検討委員会の委員、オブザーバーは、下記のとおりである。

表-1. 委員会委員名簿

	氏名	所属等
委員	中瀬 勲	兵庫県立人と自然の博物館館長、農学博士
	上嶋 英機	広島工業大学工学部客員教授、工学博士
	石田 啓祐	徳島大学大学院理工学研究部教授、理学博士
	村田 明広	徳島大学大学院理工学研究部教授、理学博士
	橘 俊光	公益財団法人兵庫県園芸・公園協会理事 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科非常勤講師、博士（農学）
オブザーバー	小舟 美帆	環境省神戸自然保護官事務所、自然保護官
	深町 加津枝	京都大学大学院地球環境学堂准教授、農学博士
	村上 裕道	兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長

2) 学術部会

鳴門海峡の渦潮世界遺産学術調査検討委員会に学術部会を設置し、学術的調査検討に向けて、調査検討分野の整理、各分野の学識者・専門家の抽出、意見聴取、研究協力依頼などを行った。学術部会の構成員は下記のとおりである。

表-2 学術部会名簿

分野	氏名	所属等
緑地環境科学	上田 萌子	兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント研究部研究員
緑地環境科学	大平 和弘	兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント研究部研究員
人文	嶽山 洋志	兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科講師

4. 鳴門海峡の渦潮に関する学術的情報収集について

鳴門海峡の渦潮に関する学術情報の収集分野を整理し、以下の学識者・専門家に学術的情報収集のご協力をいただいた。

表-5 学術分野情報収集先一覧

分野		氏名	所属等
海洋現象	海洋工学、渦潮	上嶋 英機	広島工業大学工学部客員教授
地形・地質	地学、地質学	石田 啓祐	徳島大学大学院理工学研究部教授
	地学、地質学 ジオパーク	村田 明広	徳島大学大学院理工学研究部教授
	地学、地質学 ジオパーク	加藤 茂弘	兵庫県立人と自然の博物館研究員
	地学、地質学	菊池 直樹	兵庫県立人と自然の博物館研究員
水産	水産学	上田 幸雄	独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所
植物	植物	石田 弘明	兵庫県立人と自然の博物館
鳥類	鳥類	布野 隆之	兵庫県立人と自然の博物館